

V ガイド・システムの導入による僻地教育の改善

1. 研究の目的

一般に僻地の子どもは、対人関係において消極的で自分の意見を発表する力に欠けている。素朴であるが無責任であり、社交性に乏しく、自己を孤立させる傾向がある。組織的な集団の中に入ることを避けたがる。

また僻地の学校には複式学級が多い。複式の指導においては、教師は1つの学年を直接指導し、他の学年の子どもに自学自習をさせる場合が多い。この間接指導の欠陥をできるかぎり解消し、教育効果を高めるような指導法を考えることは、僻地教育の一つの課題である。

この研究は、次のべるガイド・システムの導入によって、一方では子どもの集団活動を盛んにし、共同性と集団性を身につけさせ、一方では、複式学級における間接指導の欠陥を解消して学習能率を高めようとする実践活動を行ない、その結果、僻地の児童生徒の人格発達にどのような変化があらわれたかを検討しようとするものである。

2. ガイド・システムの構造と機能

ここでガイド・システムというのは、一種のグループングを意味している。グループのリーダーをガイドと名づけ、グループ活動において先導的な役割を持たせようとするものである。このシステムは次のものから成立っている。

1) コンビ。学級集団における人間関係の単位をコンビと名づけた。これは学級の成員2人を1組としたものとも基礎的な結合体である。Morenoは、人間関係の理論の基礎に、第一次的複数関係(primary dyad)をもってきた。そして人間社会の単位は単数(monad)ではなく、一対(dyad)であるとした。ガイド・システムでも、集団活動の核はコンビであると考え、ある期間固定した一対の子どもの結合をつくり、学級内の座席を同じくさせるものである。

2) 役割ガイド。おのおののコンビは、そのグループにおける分節的な役割活動を担う。たとえば、その所属するグループが図書を受持っていれば、そのさらに分節した仕事をコンビが行ない、その仕事をコンビで計画し推進する。

3) グループ。コンビ3組をあわせてグループを作る。グループは大体6人からなっており、これが学級における子どもの活動の単位となる。

4) グループガイド。これは学級活動のとき、グル

ープにわりあてられた活動の先導者であり、推進者である。たとえば5・6年の複式では、生活部、学習部、保健部、図書部、文化部をもうけ、おのおののグループがこの1つの役割を担うようにした。

5) 教科ガイド。グループには教科ごとに教科ガイドがおかれ、それが教科活動を司会し推進していく。これによって、間接指導の自学自習の効率を高めようとした。

6) 学級ガイド。これは学級活動全体の司会と主導的な委員の役割をつとめる。学級には正副2人の学級ガイドがおかれた。

3. 方法

1) 実験学校。このガイド・システムを実施する実験学校として、北海道空知支庁管内の最北端に位置する母子里小中学校がえられた。この地は、北海道大学雨竜演習林の常置労働者によって形成された特殊地帯であった。海拔300メートル近くの所を耕地としており、1年のうち7ヶ月は雪にとざされ、霜のない月は、7月と8月だけという地理的に、気象的に恵まれない環境にある。

昭和33年頃から住民の要望で自作化の動きが起り、昭和39年12月に、ようやく自作農化するに至った。その後さらに生活環境を改善するために、農業協同化の方向が決定され、実行に移されつつある。

学校は、小学校1・2年、3・4年、5・6年、中学校1・2年の複式学級と、中学校3年の単式学級の5学級からなっている。その人数は表1に示されている。教職員は小中学校合わせて10人である。

2) ガイド・システムの実践。この研究は、母子里の住民に自作農化の動きがあらわれ始めた昭和33年4月から行なわれた。はじめの3ケ年は予備的研究に終わったが、昭和37年4月から、この研究に協力的な教師を迎えて研究体制をととのへ、全校的な実践活動を始めた。そして、3年後の昭和40年3月まで研究が続けられた。ここで一応実験研究を終えたが、その後、小学校1・2年と3・4年の学級だけに、このシステムが続行されている。

このシステムを作るには、子どもの知能・学力・ソシオメトリー・学級における活動状況などを参考にし、最終的には担任教師の考えで決定された。なお年3回組織変えを行なった。またこのシステムは、クラブ活動にも

適用された。学校における子どもの全生活は、この3年間で、ガイド・システムの中で行なわれたことになる。

3) 学力の評価方法。新制田中 B 式知能テストと、標準学力テストとを昭和37年と39年の9月に2回実施した。標準学力テストとして、小学校に教研式小学 D 形式、中学校1・2年に教研式中学 F 形式、中学校3年に教研式中学 E 形式を用いた。

4) 人間関係の評価方法。(A) 級友1人1人について、自分がどう思っているかを3段階評価させた。各人が級友に与えた得点の総計をもって比較した。(B) 級友が自分をどう思っているかを5段階評価させた。各人が与えた評価点の総計をもって比較した。このソシオメトリーを、昭和37年、39年、42年と3回行った。

5) 生活意識の変化測定の方法。これには要求不満の度合と、土地への愛着度、および意味空間の変化の測定が含まれる。要求不満は、家庭生活の中から20項目をえらび、3段階評価させた。土地への愛着度は、「この土地へ将来住みたいかどうか」の質問によって調べた。次に意味微分法によって、10の形容詞からなる尺度によって、学校・勉強・家・母・父・手伝いの6つの概念の意味空間を求め、実験の始まる前と、終わったあとと、更にそのまた2年後と、3つの時点での変化を吟味した。

6) 教師、有識者、青年の生活意識の変化の測定。この方法として Stephenson の Q 技法を用いた。一般に僻地社会の特性として封建性、非合理性、受動性をあげることができる。これを組合わせ、親子関係、夫婦関係、男女交際、近隣関係、学校教育、しつけ、選挙、会合、生活様式、生産様式の10の領域から、部落に対する意見を80つくった。これを、教師、有識者、青年に読んでもらい、各意見のカードを、その部落に最も合っているものから、合わないものへ9段階に分類させた。これに+4から-4までの得点を与え、個人間の相関行列を求め因子分析した。

4. 結 果

1) 学力。テストの結果のうち、算数を示すと、表1のようになる。これは国語についても同じであるが、39年度は、37年度にくらべよくなっている。学力テストの結果を知能テストとの関係から吟味するため、個人ごとの成就値を求め、それを、学年別に平均した。表2は同一被験者の比較である。全体的に39年度には成就値は高くなっており、子どもの学力は充実したといっている。

2) 人間関係。ソシオメトリーの結果を学年ごとに平

表 1 算数標準学力検査平均比較

学年	人数	年度	各項目別素点平均				標準 偏差値	S.D.
			数と 計算	量と 測定	数量 関係	図形		
小 1	6	37	8.8	10.5		7.0	35.2	17.3
	4	39	19.7	9.7		8.2	47.8	5.3
2	7	37	4.6	2.4		8.1	33.7	10.4
	8	39	15.9	6.0		8.2	46.8	24.5
3	11	37	6.8	1.7	1.4	2.0	34.5	7.4
	7	39	20.0	6.0	7.0	3.4	34.7	13.3
4	15	37	2.6	1.6	4.1	3.0	39.1	6.5
	6	39	4.3	0	4.2	3.5	38.3	9.6
5	11	37	5.8	2.5	4.5	3.9	35.3	7.2
	11	39	9.4	3.3	4.1	2.9	36.4	11.1
6	17	37	2.0	3.3	6.3	8.4	39.0	5.9
	16	39	3.5	4.5	5.8	10.3	41.8	6.9
			数式	数量 関係	計量 図形			
中 1	38	37	4.8	2.9	3.6		42.1	5.6
	11	39	6.4	4.4	3.0		43.7	6.0
2	18	37	8.1	1.6	3.3		43.4	7.2
	14	39	4.7	1.4	0.9		34.9	3.8
			数式	図形	関係			
中 3	16	37	8.9	5.4	3.5		44.4	4.9
	16	39	11.0	5.6	7.0		44.9	7.9

表 2 成就値の平均 (同一児童対応による比較)

学 年	教科	37 年		39 年	
		\bar{x}	S. D.	\bar{x}	S. D.
小 3	国算	-22.0	14.18	-6.0	11.95
		-12.0	16.55	9.8	12.04
4	国算	-10.6	11.83	-5.8	7.32
		-8.1	8.82	-4.3	11.57
5	国算	-5.5	7.14	5.3	8.86
		-3.0	6.14	-6.2	8.74
6	国算	0.2	8.28	0.4	6.67
		-2.3	6.97	0.7	6.74
中 1	国算	0	5.37	4.0	7.22
		-12.5	5.85	-4.0	4.04
2	国算	-6.8	7.54	-3.9	7.70
		-1.2	8.19	-5.0	8.88
3	国算	3.4	9.44	2.4	7.36
		-4.9	6.77	-0.2	6.56

均し、それを図示すると、図1、図2のようになる。昭和37年から39年にかけて、どの学年も得点を増してい

図1 Sociometry (A)

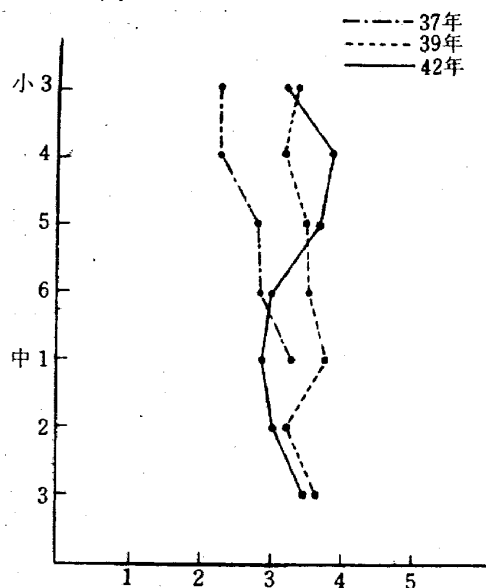
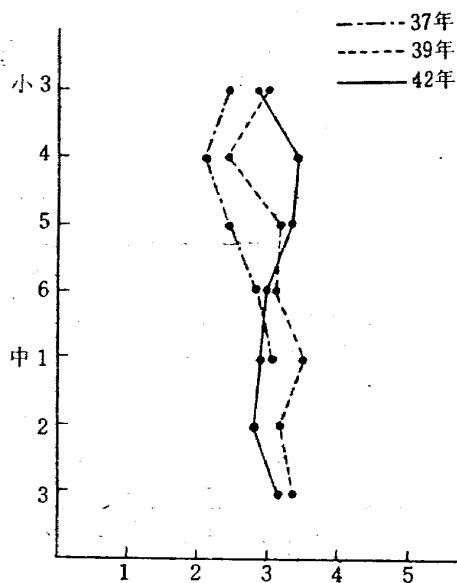


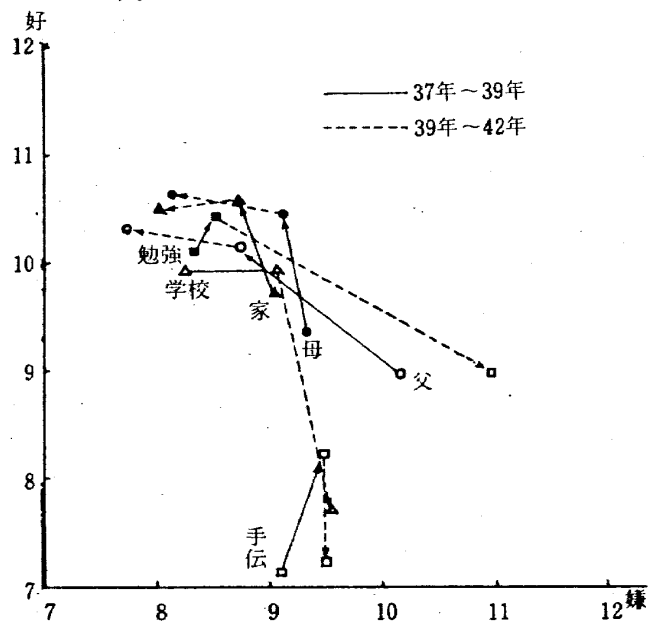
図2 Sociometry (B)



る。Aは級友に対する心理的距離をあらわし、Bは、級友に対して自分がもつ人間関係の自信の度合を示している。これにより、ガイド・システムの実施後、子どもたちの間の心理的距離は縮少し、かつ人間関係に対する自信の度合が深まってきたことを示す。なお、昭和42年になると、小学校6年と、中学校の子ども得点は減少している。この学年には、昭和40年以後ガイド・システムの実践を中止しており、これがここに反映されているものと解される。

3) 子どもの生活意識。要求不満度についての結果の表は省略するが、昭和37年度から39年度にかけ、要求不満の得点は減少している。昭和42年は、39年と変わ

図3 意味空間の変化 (小3・4年)



らない。ガイド・システムによる学校生活の充実感が、要求不満の減少をきたしたとも解される。

土地への愛着度も、年度が進むにつれ、よその土地へ出たいとの希望が少なくなっている。そして、この土地へ住みたいという率が増している。

次に、勉強・学校・家・父・母・手伝いの6つの概念の意味空間を「好」と「嫌」の2つの軸によって表現すると図3のようになる。他の学年の図は省略したが、これらの概念が39年度には、「好」の方へ移動していることがわかる。もっとも、昭和42年には、学校・勉強・手伝いの概念が、「嫌」の方に移動している。

4) 教師、有識者、青年の部落観。Q技法によって部落観を評定させ、その結果の相関行列を因子分析した結果が、表3に示されている。この3つの群で、因子バ

表3 生活意識の因子行列

年度	評定者		I	II	III
37年	教師	1 A	.56	.22	-.09
		2 B	.34	.42	-.04
		3 C	.34	.38	-.01
		4 D	.56	.20	.05
	部落有識者	5 E	-.04	-.19	.01
		6 F	-.23	-.58	.18
		7 G	-.01	-.33	.11
		8 H	-.22	-.65	.04
	青年	9 I	.12	-.19	.28
		10 J	.00	-.16	.61
		11 K	.64	-.14	.18
		12 L	.39	.15	.57

39年	教 師	13	B	.53	.12	—	.28
		14		.58	.04	—	.05
42年	教 師	15	M	.75	—	.01	.04
		16		.74	—	.20	.21
		17		.52	.07		.34
	部 落 有識者	18	F	.19	—	.57	.27
		19		.01	—	.34	.42
		20		—	.06	—	.39
	青 年	21	I	—	.01	—	.47
		22		—	.05	—	.17
		23		.11	—	.18	.68

表 4 部 落 観 の 差 異

		教 師	有識者	青 年
民 主 性	37 年	—39.5	30.8	9.5
	42 年	2.7	56.7	70.7
合 理 性	37 年	—34.8	47.5	— 3.5
	42 年	—22.7	5.0	—10.0
能 動 性	37 年	—15.2	15.0	—18.5
	42 年	—48.7	0	2.3

ターンが分かれていて、第1因子は、教師群、第2因子は有識者群、第3因子は、青年群に高い負荷量を持つ。それで、3群について評定点を、民主性、合理性、能動性の3つに分けて平均した。それが表4に示される。全体的に、部落を観る方向が、好転していることがわかる。ガイド・システムの実践は、学級のみでなく、部落全体にも影響を及ぼしたとも考えられる。

5. 要 約

北母子里小中学校にガイド・システムを導入して、人間関係や指導方法の改善を図ったのであるが、これを実施した前後各1回、および研究の終わった2年後に1回と計3回、子どもの発達の変化を評価測定した結果を要約すると次のようになる。

1) 標準学力テストでは、37年度より、39年度の方がよくなっている。成就指数で比較しても後の方が高くなっていて、学力が充実したと見ることができる。

2) 人間関係において、子どもの相互の心理的距離は接近し、相手から好かれていたとの自信が高まってきた。しかし、このシステムを採用しなくなったあとは、この傾向が後退している。

3) 要求不満度は、この実践を通して減少していった。

4) 土地への愛着度が高まってきた。

5) 子どもの生活に重要だと思われる6つの概念の意味空間が好ましい方向に移動してきた。

6) 教師、有識者、青年各層の部落観は、民主性、合理性、能動性において改善されているという方向に変化してきた。

さて以上のような変化が、ガイド・システムの実践によるものかどうか確かめることはできない。しかし、この教育実践の時期を境に、母子里の子どもと、その住民の社会的風土は大きく変ってきたということは言えるだろう。

(福 島 正 治)

VI 討 論 の 概 要

5つの研究者ブロックを代表して以上5人の発表があり、引続いて近藤元の司会の下に質疑討論が行なわれた。時間の都合上、質問・意見がかわせて提出され、それに対して発表者側からの返答がなされた。その概要は次の通りである。

児玉(日本女子大学): どの報告も興味深く聴いたが、僻地児童が市街地の統合中学校に入学した後の意識や行動面の変容についてききたい。僻地児童に特徴的な側面の変容、たとえば行動のテンポの変化とか、考え方や判断の内容面での変容などについてはどのような結果がえられたか。松下: そこまで細かく吟味していない。僻地児童の考え方や判断の仕方の変容はたしかに重要な側面である。われわれのブロックの当面の研究課題は僻

地児童の性格面の変容に限定されていたので、そちらの面については今後の研究課題として追跡検討してみたい。

津留(神戸大学): 僻地社会の変動をどういう視点からとらえるかはむずかしい問題である。僻地社会は今日非常に複雑多様な動き方をしている。僻地でありながらテレビの普及率が極めて高い地域もあれば、また一部では収入がよくなって僻地特有の貧しさから脱却しつつある地域もある。このような文化的・経済的変貌からすると、従来の僻地観をある程度修正しなければならないのではないか。したがって僻地社会の変容が子どもの人格形成にどう影響しているかを問題とする場合には、地域のファクターが多すぎて何がどう影響しているかわから

the rural school children resulting from their attendance at the urban larger secondary school. The personality changes were investigated from the following five aspects; scholastic records, the ways in which the pupil views his school life, peer and friendship groups, pupil behavior ratings by the irteachers, and Y-G Personality Test results.

1) Scholastic records of 457 rural school pupils were collected from their cumulative records. Generally the results indicate that their ratings are lower than those of the standard group and that the trends continues in a similar manner over the three grades during secondary school attendance.

2) The rural pupils (418) and the standard group (525) were investigarted by the use of a questionnaire with regard to their experiences and feelings about their school life and peers. The rural pupils appear to have adjusted in a calm, secure, passive and negative way to learning, their teachers and their school life; they do not display any of the more striking problem feelings toward the factors than the standard group and nor was there any change over the three grades.

3) Their personality traits were obtained through the behavior ratings which consisted of 20 paired items and the Y-G Personality Test. On the behavior ratings the rural pupils were rated less isolated, sad, resistive but not as good in their achievements of school subjects and not as positive in learning activities as the standard group, in the first and the second grades; in the third grade the subject pupils were rated strikingly poorer in achievements, negative in learning activities, more un-sociable, of the non-leadership type, and of the non-popularity type, etc. That is to say, the personality characteristics of the rural pupils while not conspicuous in the lower grades, they become clearer in the higher grades. On the Y-G Personality Test, the rural pupils are of more A-Type and C-Type in the lower grades but this tendency decreases in the higher grades.

RURAL EDUCATION IMPROVEMENT THROUGH THE 'GUIDE-SYSTEM'

The 'Guide-system' is one of the organizations for group guidance. Two children form a team which we call a kombi. This team is the nucleus of a group and a unit of classroom activities. A group which consists of three kombis is provided with a guide as a leader, and this guide leads the group in all classroom activities and learning.

Through this guide-system we have tried to develop pupil cooperativeness and improve the effects of indirect guidance in a compound class. In this study we purposed to examine the changes in personality development of the rural children after our practising the guide-system for three years. The subjects were 123 Moshiri Primary-Secondary School children, in Horokanai, Hokkaido. The following tests were administered to them three times to examine their developmental changes in 1962, 1964, and 1967.

1) Kyoken-siki achievement tests. According to the results, their achievement in school subjects generally improved.

2) Sociometric tests. The results showed that the psychological distance between the subjects was reduced and their human relations became more close.

3) The degree of frustration covering 20 items selected from their home lives was investigated. The results showed that the degree of frustration decreased in all grades.

4) According to the responses to a questionnaire on their attachment to their native village, the number of the subjects who wanted to live there has been increasing.

5) The changes in their emotional meaning space were examined by Osgood's semantic differential method. The meaning of six concepts——'school,' study, 'father,' 'mother,' 'home,' and 'assistance of domestic affairs'——moved in the direction of the "likes-axis".

6) The social climate of this community was rated by the teachers, inhabitants, and youths in the Moshiri community. In this rating, opinions were gathered utilizing Stephenson's Q-technique. They all recognized that this community had become more democratic, more active, and more rational each year.

SYMPOSIUM 1

REFLECTION ON EDUCATIONAL PSYCHOLOGY IN POST-WAR JAPAN

Chairman: Mantaro Kido (Hokkaido University of Education)

Discussants: Arata Yoda (Japan Women's College)

Kinju Matsumoto (Tohoku University)

Keisuke Sawada (University of Tokyo)

Aritsune Tsuzuki (Nagoya University)

Yasumasa Miki (University of Tokyo)

At the beginning Chairman, Kido explained the significance of this Symposium. Then the discussants reported on the theme. Here are some of their points.

Yoda: (From general point of view)

The principal cause of the barrenness of educational psychology in Japan is that it was imported from U.S.A. and transplanted uncritically without due consideration of the specific conditions prevailing in Japan.

Although educational psychology in its ideal form must be closely connected with educational practice, we should be cautious in applying the various findings to practice. In my opinion, more basic studies should be conducted patiently and steadily for some time to come.

Matsumoto: (From the view point of child psychology and the psychology of adolescence)

Educational psychology in post-war Japan has not been adapted to the contemporary world where opposing social forces are at work. We must try hard to construct our own educational psychology by taking the materialistic-dialectical position.